
玉響 - Crossed road in spring day

由城 要

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

玉響 - Crossed road in spring day

【Nコード】

N0072Q

【作者名】

由城 要

【あらすじ】

人生の中で一番暇な時間を過ごす、高校3年の3月。

同じ時間、同じ場所、同じ境遇。

4人の少女達が繰り広げる、まだ『始まらない』物語。

序章・春告花

春の夜、電灯すらない月明かりの下。桜の老木から、はらはら花びら舞い落ちる。土の上に落ちた花びらは、仄暗い闇にうつすら浮かび、地面は淡い斑点に変わる。

「……………わぁ」

別れを惜しみざわめく枝を、少女は見つめる。感嘆の音が響き、そしてまだ冷たい春の風に流されていく。輪郭で切りそろえた髪が桜と揺れた。

少女は老木の根に腰を下ろし、満開の花々を見上げる。

「今年も綺麗に咲いたね……………」

薄明かりの下で、眩きは響いて消えた。

其の壱・麗しき少女の憂鬱

「……」

ある春の夜の深夜過ぎ。少女はハンドバックを片手に家の門を開けた。

赤く染めた長髪に整った顔立ち。睫毛は長く、濃い化粧をしていないにも関わらず、唇は赤い。立っているだけでも絵になるような麗しい美女。

美しい顔立ちをした少女は、目の前に現れた旧家の日本庭園を歩きながら、大きくため息をついた。何処の家も寝静まったこの時間帯に、居間の電気だけが細々と灯っている。それを見た瞬間、忘れていた苛立ちが燃えカスに火をつけるように少女の心に蘇ってきた。赤っぽい髪をかきあげて、三笠^{みかさ} 芽衣^{めい}は玄関を開けた。すると待っていたかのように居間から見慣れた姿が現れる。

「あ……おかえりなさい。芽衣さん」
「……ただいま」

芽衣はぶつきらばうにそう呟いて、ブーツを脱いだ。

居間から現れたのはパーマつけのある髪を後ろで纏めた40ほどの女だった。芽衣と比べると美人ではないが、内気そうな顔つきで日本女性らしい淑やかな雰囲気を持っている。

彼女はさつさと自室へ戻ろうとする芽衣の背中に、慌てて声をかけた。

「芽衣さん。その……夕食は……」

おそらく寝てしまった家族に気を使っているのだろう。小声で呟く彼女に芽衣は苛立った表情で振り返る。

「……食べてきた」

「そ、そうですか。……あの、でもなるべく夕食に出しなさいって、お父様が……」

「……」

女の言葉を見殺しに芽衣は階段を上がっていく。おそらく後ろでは困った表情を浮かべているだろう。しかし芽衣は振り返ろうとはしなかった。

階段に足をかけるたびに、闇はどんどん深まっていく。芽衣の心もまた苛立ちと共に闇の中に沈みこんでいくようだった。

其の壱・桜と少女のしがらみ

「加南子……加南子？」

ある春の夜の深夜過ぎ。廊下から近づいてくる足音に気付いて、少女は椅子に腰を下ろした。

ショートカットの黒髪に、ジャケットとジーンズ。切れ長の目とその背格好で彼女はよく男と間違われる。男よりも男らしい、というのが彼女を表すのに最も相応しい言葉だろう。本人は殆ど意識していないが、彼女の周りの人間はよくそう言う。

しばらくして、部屋のドアが開いた。顔を出したのは笑い皺を目尻に刻んだ小柄な老女だ。

「あら、いたのね加南子。返事が聞こえなかったから……私ももう年かしらねえ」

「いえ、私も勉強に集中していたので……」

西邑 にしむら 加南子 かなこ。それが彼女の名前だ。

加南子は手元にあったノートを引き寄せて、顔をほころばせる祖母を見つめた。その顔はにこやかに笑っているが、その瞳は暗く沈んでいる。加南子にはそれが分かっていた。

祖母はふと加南子の部屋の窓に視線を向ける。

「……あら、寒いと思ったら窓が開いてるのね」

加南子は視線を窓へと向けた。表情こそ変えないが、一瞬焦りを覚えたのはたしかだ。なぜなら、彼女はついさっき窓から室内へと忍び込んできたのだから。

祖母は気付かない様子で窓を閉める。そしてカーテンを閉めながら、呟くように言った。

「加南子が生まれた時に、家の庭に桜を植えたんだけど……今年も咲かないのね。病気がしら」

加南子はふと窓から下を見つめる。カーテンの間から覗く小さな桜の苗木は、冷たい風に今にも折れそうな姿をしていた。他の桜は満開に咲き誇る時期だが、あの木には蕾すらついていない。

「……」

きつと桜も、あの時から時間が止まったままなのだ。
加南子はそう思った。

其の壱・体を共有する少女たち

「……」

ある春の夜の深夜過ぎ。少女は読んでいた本を机に置いて、眼鏡を押し上げた。気付けばもう12時を過ぎている。また時を忘れて読み耽ってしまったと、少女はため息をついた。

黒髪を二つに結び、黒縁の眼鏡をかけた少女だ。しかし地味な外見とは裏腹に彼女の部屋の中は真つ青な熊や黄色のアヒルが埋め尽くし、壁紙はピンクで染められている。

「……『あの一』」

「……なんですか」

少女の声が響く。対話しているように聞こえるが、声色は一つだ。

『あの……聖さん。本当にお仕事する気、ありますか……？』

「今は気分になれません」

『あ、そうですか……』

少女は息を吐いて、椅子から腰をあげた。

彼女の名前は藍原^{あいは}聖^{ひじり}。地味な外見に派手なもの好き、というちよつと変わった性格を持つ高校生だが、彼女の特徴は他にもある。

聖の声は再び自分に問いかける。

『あの、さつきから聖さん何を読んでいたんですか……？』

「広辞苑です」

『……そうですか』

なんともリアクションのしにくい発言に、聖は苦笑を浮かべた。
しかしそれもすぐ真顔に変わる。

「……いつまでたつても慣れませんね、この状態は。自分で自分に話しかけているような奇妙な気分です」

『私もです……と、というか聖さんさえお仕事していただければ、私も安心して元の姿に戻れるんですけど……』

聖は静かにため息を吐いた。

聖が自分の体の異変に気付いたのは数ヶ月前のことだ。頭の中に突然潜り込んできたこの『思念』は、それからずっと聖の体に宿っている。生まれてから今まで、こういった不思議な現象には何度も出くわしてきたが、自分の体に別な『思念』が宿るという出来事は初めてだった。

「貴女はもう死んでいるんでしょう。元の姿があるんですか？」

『えっと、それはそうなんですけど……私はその……ある人の一瞬の思念が具現化したものなんです。ほら、よくあるじゃないですか、誰かに燃えるような恋を抱いちゃった瞬間とか、殺してやりたいくらい憎いと思う瞬間とか』

聖は真顔のまま、ぽんつと手を叩いた。

「生霊ですね」

『な、なんだかそう言われると生々しいんですけど……そんな感じですかね。私自身はもう亡くなっていて、もう転生しちゃってるんですけど』

「それで、生前の「一瞬の思念」を解消するために、力のありそう

な私に近づいてきたと」

聖は首を上下に振った。

マイペースかつわが道をゆく聖にとって体を誰かと共有していいうがしてまいが、あまり気にするほどのことでもない。しかし、こういった『思念』を常に己の精神で支えるのは、体にも良くないことだった。聖の体を共有することの『思念』は無害だが、害のある『思念』と関わってしまった場合、死に至ることもある。聖はため息をついて立ち上がった。

「……仕方ないですね。そろそろ動き出しますか」

其の貳・残された想い

世の中の人間には『プラス』と『マイナス』がある。何がプラスで何がマイナスなのかは分らない。それは霊能力と呼ばれるものかもしれないし、オーラとか思念と呼ばれるものかもしれない。それともそれは魂から浮かび上がる生気かもしれない。

だが世の中の人間は全て『プラス』と『マイナス』に分けられるのは確かだ。それは聖の弁である。

「今年ももうすぐ見納めかあ……」

例えば桜の老木の幹に座る少女は『プラス』の人間である。平凡な顔に平凡なプロポーション、平凡な口調……。全て平凡という言葉で言い表すことの出来そうな彼女だが、実はプラスの人間の中でも珍しいとされる『超プラス』人間である。

「……ちよつと寂しいね」

月明かりが照らす桜の花を見つめる少女。その体を白っぽい光がまるで膜のように覆っている。

「実はね、遠くの大学に決まっちゃって……来月から寮に入るんだ」

世の中の人間は少なからず『ミスト』を持っている。大小の違いはあるが、それは誰もが必ず持っているもの。それは人間の感情によって膨れ上がり、時に脱皮のようにミストのみが残される場合もある。

ある瞬間の、残された悲しみや苦しみの感情を『ミスト』と呼ぶ。

それは加南子の弁である。

「……でもまた来年のこの時期には見に来るよ」

少女の言葉に悲しむように、桜の木が揺れる。揺れるたびに花びらがハラハラと舞い落ちて、根元は桜色の絨毯に変わっていった。上の方にあるすっかりした枝の上に、二つの目玉が浮かんでいる。少女には見えていないが、目玉はじつと少女を見つめていた。まるで親しい友人との別れを惜しむように。

「……」

世の中の人間の中には一瞬の感情を『スピリット』として残してしまふ者がいる。それは生霊という言葉に近いかもしれない。しかし普通ならば感情は目に見えないし、形にもならない。それが他の、憎しみや悲しみという辛く苦しい別な感情と交じり合うと、時折それが具現化することがある。

『スピリット』は強い思念を持った感情であり、それはおそらく幽霊の正体と言えるかもしれない。それは芽衣の弁である。

「……来年も綺麗に咲くといいね」

少女は立ち上がると、花吹雪を背にして歩き出す。桜の老木はその背中をじつと見つめていた。

其の貳・今は亡き少女の語りごと

やっとやる気になって下さったんですね、聖さん。嬉しいです。

ええと……一度説明をして欲しいんですけど。はい、じゃあ生前の私について説明させてもらいますね。

私は、生きているところはチハルと呼ばれてました。といつてもずっと昔なんですけどね。え？ちゃんと説明を、ですか。ええと、明治時代あたりだと考えて下さい。亡くなった後、世の中がどう変わっていったのかよく分からないので、説明もしにくいんですが……あ、はい、なるべく頑張ります。

私は18歳で亡くなりました。季節は春です。桜が咲く少し前、ですね。もともと体が弱くて、生まれた頃からお医者様に『今年が山場』って言われ続けてたんですけど、母や父が一生懸命御参りや祈願をしてくれたおかげで18歳の春まで生きることが出来たんです。え、藪医者ですか。でも長く生きていられたのは感謝していますよ。

私はずっと長屋の和室で過ごしてきましたんですが、15歳を過ぎた頃には歩き回れるくらい回復しました。もしかしたら完治するかもなんて皆思ってたんです。私もそのうちの一人でしたよ。

あの頃、家の外に出ることが許されて……。私、初めて外の風景を見て、とても感動しました。四季の風景なんて窓の中からしか見たことがなかったから。

夏の若葉の色、秋の夕焼けに染まる紅葉、冬の冷たくて澄んだ空気が、そして春のあの桜……。春は特に好きでした。隣の空き家に桜の老木があって、それを見に行くのが楽しみだったんです。蕾が膨らむのを毎日毎日飽きもせず眺めて、満開になったときは声をあ

げて喜びました。わーい、わーいつて。驚いた父と母が駆けつけるくらいでしたよ。ふふっ。あの時は楽しかったなあ。

でもお話の終わりはなんとなくわかりますよね？……そうです。病が再発して、次の春を迎えることが出来ないまま……。ありがちですか？そうかもしれないですね……。自分の好きな季節に死ねる人なんて、本当に運のいい人だけですし。

……はい？あ、要点を言わなければ解決してもらえませんか。たしかに。すみません。

聖さんの言葉を借りると、今の『私』は外に出られることが出来たころの『思念』です。それが何かの拍子に具現化してしまったようで……。

私は桜の季節に死ぬことが出来ませんでした。病気が再発したときは死の覚悟をしていたんです。でも一つだけ心残りがありました。それはあの桜の老木です。……あの老木が今年も咲いてくれるのか、凄く不安だったんです。手入れは誰もしていなかったようなので。あの桜が咲くところを見ることができれば、私の心残り何もありません。

……簡単、ですか？わあ、それなら安心してお任せできそうです。聖さんを選んで良かったですよ。実は聖さんみたいな……ええと、『超マイナス人間』でしたっけ？……そうゆう感じの人が他にも何人かいて、どの人にしようか困ったんです。一人はちよつと近づきがたい美人で、もう一人は格好良い男の人で……。なんだか平々凡々の私には近づきがたいので、聖さんに決めました。え、いえ、決して地味そうとかそういう基準で決めただけじゃないです。まさかとても派手好きな方だとは思っていませんでした……。

え？明日から探していただけるんですか。嬉しいです、ありがとうございます。え？……今日はダイガクのニューガクシリヨウを揃

えなければいけない？ なんだか大変ですね、最近の女性って。
それじゃあ、私も手掛かりになるようなことを思い出してみよう
と思います。……明日、頑張りましょうね。

其の式・忍び寄る闇

三笠芽衣には1つの悩みがある。それは自分でもどうすることも出来ない悩みであり、それを解決する方法がないからこそ、彼女は逃げることしか出来なかった。

「めーいーちゃんっ」

自室の扉を叩く音に、芽衣は苦笑を浮かべた。どうぞ、と声をかけると、5歳くらいの男の子が顔を出す。黒髪にくりくりした目が特徴的な子供。片手に持っているのはケーキを乗せた皿だ。

芽衣はその様子を見ると、テーブルの上に広げていた資料をベッドに乗せた。

「たっくん、またここで食べるの？」

「うんっ」

子供の名前は三笠 卓真^{たくま}。13歳離れた芽衣の弟だが、その顔は芽衣に似ても似つかない。どちらかというと強気に見える芽衣とくらべて、卓真は少し内気そうな顔をしている。

卓真は芽衣の隣に座るとテーブルの上に皿を置いた。皿には2人分のケーキが乗っていて、フォークも2人分ある。

それを目にした瞬間、芽衣の表情が曇った。

「お母さんがね、めいちゃんにも持って行きなさいって」

「……そう」

ハイ、とフォークを手渡され、芽衣はじつとケーキに乗せられた

イチゴを見つめた。ショートケーキの上に乗せられたイチゴは真っ赤に染まっている。しかしそれを食べようと思わないのは、その色が芽衣の一番嫌いな色だからかもしれない。

人の体内を流れる、命の色。芽衣には赤い色がそんな生々しいものに思えて仕方が無かった。

「?……おねーちゃん?」

ふとイチゴを見つめる芽衣の視線に、卓真が首を傾げた。不安に思ったのか、フォークを持っていない手で年上の姉の右手に触れる。その瞬間、芽衣の頭の中に叫び声が聞こえた。

『……何故っ、何故なのよっ!』

『こんなの私のせいじゃないわ!仕方の無いことじゃない、なのに

……』

『私の全てを狂わせておいて……』

「……っ!」

声は恨みのこもった女の声だった。まるで狂人のような叫び声、そして涙声。聞いているだけで胸の中を締め付けられるような、そんな辛く悲しい言葉だった。耳を覆いたくても、声は頭の中に響いてくる。

「やめてっ!」

芽衣は叫んだ。芽衣自身の声も、あの声の主のように悲しい響きに変わってしまったようだった。

女の声は一瞬にして止んだ。しかし、次の瞬間、隣にいた卓真が声をあげて泣き出した。芽衣は一瞬呆然として、それから慌てて卓真の手をとる。やめて、と叫びながら、おそらく反射的に気遣う弟の手を払いのけていたのだ。

「う、ごめん、たつくん。違うの、たつくんに言ったんじゃないって……」

弟を宥めながら、芽衣は心の中でため息を吐いた。まただ、と思うのと同時に自由にならない自分の『力』にうんざりさせられる。

「そ、それよりケーキ食べようか！ね！」

芽衣は泣き止んだ弟の口に自分のイチゴを放り込んだ。大きなイチゴを押し込まれた卓真は顔を真っ赤にしたまま、口の中に入ってきたイチゴを食べる。

甘いもの好きの弟は泣き出しても甘いものを食べると笑顔に戻るという、とても単純な性格をしていた。芽衣のイチゴを貰うと、嬉しそうに泣き笑いの顔を浮かべる。

「美味しい？」

「……うんっ」

ケーキを平らげる頃には、卓真の顔は笑顔に戻っていた。芽衣は安堵して、時計に視線を向ける。時計の針は8時を差そうとしていた。もうすぐ卓真の寝る時間だ。

『卓真ー、もうそろそろ降りてらっしゃい』

丁度よく、下の階から声が聞こえてきた。卓真は皿を持って、芽

衣の部屋の扉を開ける。

「うん！……それじゃ、めいちゃんオヤスミなさい」

「おやすみ、たっくん」

また明日、と手を降る芽衣に、卓真も皿を持った手を振って見せた。扉が閉まるのを確認して、芽衣はベッドに乗せていた資料をテーブルの上に戻す。

卓真の足音がバタバタと階段を下っているのが聞こえてくる。芽衣はそれを聞きながら、テレビのスイッチを切った。テレビの画面が一瞬にして真っ黒に染まった刹那、遠ざかっていく弟の足音がパタッと止んだ。

「……？」

芽衣は首を傾げ、そしてまたテーブルの上にある資料に目を通し始めた。

今日中にこの大学の入学資料を揃えてしまわなければいけない。資料を確認し始めると、弟の足音のことはすぐに芽衣の頭から消えてしまった。

其の式・忘れられないもの

早朝、帰省ラッシュが始まるより少し早い時間帯。早起きの祖母と同じ時間帯に起床した加南子は、友人と約束があると言って家を出た。

まだ人通りの少ない歩道を歩きながら、加南子はジャケットのポケットに手を入れた。春とはいえ、まだ風は冷たい。それでも加南子は今日一日を家の中でじっと過ごすことが出来なかった。

地下鉄に乗り継ぎ、郊外へ出る。電車内は郊外へ出れば出るほどに乗客は少なくなり、目的地に着く頃には一つの車両に1人や2人ほどしかいなくなった。

「……」

携帯も開かず、ウォークマンも使わず、加南子はただじっと窓に流れる風景を見つめる。ぼんやりと電車に揺られる自分の姿は他の客にはどう見えるのだろう。加南子はそんなことを考えながら、車掌のアナウンスを聞いていた。

電車に乗って2時間ほど経った頃だろうか。電車が橋の上にさしかかった時、車掌の間の抜けたアナウンスが聞こえた。加南子は携帯のディスプレイで時間を確認すると、電車がホームに入ったのを見て立ち上がった。

「……寒」

電車から出て、加南子はそう呟いた。河原が近くにあるせいか、風が強い。

ホームには年寄りや、ベビーカーをひいて歩く女の人の姿しかな

かった。加南子は改札を出ると、迷うことなく西口の階段を下る。外に出るとそこには住宅街が広がっていた。どこも真新しい家ばかりが並んでいて、舗装された道路沿いに同じような家が何軒も建ち並んでいる。

それでも加南子は目的地をすぐに見つけることが出来た。

「……」

駅へと続く坂を上り、道路の右側に曲がる。すると他の家より少し年季の入った一軒の家が現れた。2階建てで庭は広く、車一台分の車庫がついている。道路から見えないように植木で囲いがされている。

加南子はその家の前で足を止めた。家には人気が無く、車庫にも車がない。おそらく誰も住んでいないのだろう。

「あれから……15年か」

加南子は家を見上げながら、そう呟いた。

犬の散歩をしていた老人が加南子の姿に首を傾げながら擦れ違ふ。誰も住んでいない家を見つめる自分はさぞ奇妙に映っているだろう。加南子はそれでもじっと家を見上げたままだった。

ふと、加南子の視界に黄色いボールが入ってきた。何処からか転がってきたのだろう。ボールは坂の途中でカーブし、加南子の見つめていた家の車庫へと入っていった。

『あつ……！』

背後から男の子の声が聞こえた。加南子が振り返ると、5歳か6歳くらいの子供がボールを追って車庫へと入っていく。少し内気そうな顔をした少年だ。この辺りの子供だろうか。加南子はその背中

を見つめる。すると今度は彼の後を追って同じ歳くらいの男の子が駈けていった。

『ボールあつたよ!』

『良かったあ。じゃあ、今度はあっち行こうよ』

車庫を覗き込んだ加南子は、二人の子供の声に再び首を傾げた。車庫の中には先に車庫の中に入って来た内気そうな少年の姿しかない。

「……」

加南子は顔を顰めた。そして車庫の奥に残された子供に視線を向ける。少年はボールについた砂を払い落とすと、加南子の姿に気付いて驚いたようだった。

内気そうな顔が、叱られるのを怖がる不安な表情に変わる。

『……おにーちゃん、ここの人……?』

少年のあまりの怖がりように、加南子はふとポケットから手を出した。こんな格好をしていれば、ガラの悪い不良に見えるのも仕方ないことだ。

加南子は肩を竦めて言う。

「一応おねーちゃんなんだけど……。キミはここに住んでるの?」

加南子はもともとあまり笑うのが得意な方ではない。だから子供を相手にするのは苦手だった。子供はオドオドしながら首を横に振る。辺りを見回すと、ふと何かに気付いたように声を小さくした。

『うん。ちょっと遠くに来ちゃった……』

言われて初めて、不安を感じたかのような表情だった。これくらいの子供にはよくあることだろうと加南子は思う。はしゃぎ過ぎて前後が見えなくなる。そして知らない風景に気付くとすぐ泣き出す。

「……家はどこ？」

『えっと……。○○ってところ』

ふと加南子の表情が曇った。少年が口にした住所は加南子の知識が確かなら、その家はここから少々遠い場所にあった。子供の足で歩くことが出来ないわけではないが、間違ってもボールを追いかけて辿り着くような場所ではない。

坂の先にある交差点の方から男の子の声が聞こえてくる。

『たっくん。行こうよー！』

『あ、うん！』

さようなら、と丁寧にお辞儀をして駆け出そうとする少年を加南子は咄嗟に捕まえた。

「ちょっと待って。……あの子は友達？」

『え？……うん。名前知らないけど』

名前を知らない人間を友人と呼べるのかどうかは知らないが、少年にとっては一緒に遊ぶ人間が全て友達なのだろう。

加南子は少年の右腕を掴んだまま、膝を折った。そして子供と同じ視点で、目の前の少年に言い聞かせる。

「たつくん、だっけ？……私がこれから言うこと、ちゃんと聞ける？」
『？』

たつくんという子供は、加南子の言葉に首を傾げた。初対面の人間に『言うことを聞け』と言われていたのだから、不思議に思うのは仕方ないことだろう。しかしこの少年は内気そうな見た目とは逆に、聡明な頭を持っているようだった。

少年は加南子の顔を見上げる。

「私が家まで送ってあげるから、あの子についていっちゃ駄目。……分かる？」

最後の一言に、加南子の言葉の意味の全てが込められていた。あの子供は人間ではない。存在が極めて危うい、人間ではないものの類。しかもこんな小さな子供を何処からか連れてくるのは、『神隠し』にも近い。

少年は加南子の言葉に顔を歪ませた。どうすればいいのか、判断しかねているような表情だった。何故、と聞かないのはこの子自身、なんとなく分かっているからだろう。

『たつくーん。まだー？』

急かすように声が近づいてくる。

白昼の住宅街でまさか神隠しに出会うとは加南子も思っていなかった。おそらくそれは、この一画だけ他の場所と反対に負のミストが宿っているからかもしれない。温かな家庭が広がる住宅街の中で、ここだけは悲しい出来事に縛られている。

少年は困ったように加南子を見て、そして声のする方に視線を向けた。

『でも……あの子、あさつてまで遊んでくれればいいって……』
「明後日になったらこっちに戻って来れなくなるかもしれない」
『で、でもお……』

加南子の怖い表情に少年は泣きそうだった。加南子は呆れたようにため息をつく。これだから子供は嫌いだ。何処までが危険なのか全く分かっていない。

こうなったら泣かせてでもここから引きずっていこうと手を伸ばしたその時、加南子の背後から声がした。

「あの……こちらのお宅に何か用ですかね？」
「っ！」

振り返ると、さつき擦れ違った老人が戻ってきたようだった。黒い毛をした柴犬が加南子に向かって尻尾を振っている。

しまった、と加南子は思った。咄嗟に振り返ると先ほどまで車庫の奥にいた少年の姿が忽然と消えうせていた。

老人は困ったように言う。

「お兄さんは泥棒には見えないが……この家はあんまり近づかない方が良いでしょう。十数年前に殺人があつて、それ以来空き家ですから……」
「……そう、ですか」

老人はおそらく随分前からここに住んでいるのだろう。加南子は適当に返事を返すと、老人の視線を避けるようにして歩き出した。そして真っ直ぐに登ってきた坂を下り始める。柴犬が尻尾を振って、加南子の背中に一声吼えた。そして今度は別れを惜しむように鼻を鳴らし始める。

「……！」

ふと、加南子の背中を見つめていた老人が何かに気付いたように声をあげた。

「か、カナちゃん……？カナちゃんじゃないのかい？」
「……」

加南子は歩く速度を速め、老人の視線から逃げるように走った。後ろから自分の名前を呼ぶ声が木霊していたが、足を止めることは出来なかった。

其の参・少女と義母と弟と

「あーあ……」

通いなれたファーストフードショップの店内で芽衣はため息をついた。平日の朝だけに客の姿は少ない。数人のサラリーマンや大学生らしき姿がちらほらと見えるだけだ。

芽衣はハンバーガーを片手に財布の中身を確認した。お金はあるが、ハンバーガーを三日三晩食べるのはキツイものがある。たまには別なものを食べたいと思うが、それ以外だと金がかかる。

「……飽きた」

半分食べたハンバーガーを投げ出し、芽衣はバッグの中から携帯電話を取り出した。メモリの中身を調べながら暇を潰してくれるような友人を探す。

（ミカはバイトで、ユミはデートで、ヒトミは就職先の研修だっけ……？）

高校3年の1月から4月まではおそらく現代の若者にとって一番暇な時期じゃないかと、芽衣は思った。大学入試さえ終われば、あとは卒業式を待つだけ。その間高校3年生は長い春休みに入る。休みに入る前に担任が言っていた言葉を芽衣は思い出した。

『あんまりダラけるんじゃないわよー。この時期はどいつもこいつも一斉に車の免許取って、一斉に事故起すんだから。事故を起さないのは当然だけど、巻き込まれないように！あと初心者同士でドラ

イブなんか死に行くようなもんだからねー」

(……免許かぁ。そういやヤツくんは教習所って言ってたっけ……)

携帯のメモリに彼氏の名前が表示され、芽衣はテーブルに突っ伏した。結局友人も彼氏も何かと用事があつて遊ぶことが出来ない。嫌がらせに悪戯電話でもしてやろうか、と携帯をいじっていた時、突然バイブが鳴った。

「……げ」

芽衣はついそう呟いていた。携帯はいじっているときに着信すると、間違つて電話に出てしまうことが多々ある。

ディスプレイには『三笠亜由美』と表示されていた。芽衣は毎晩夜遅くまで自分を待っているあの女のことを思い出す。母親として振舞っているつもりなのかどうかは知らないが、あまり顔を合わせたくない相手だった。卓真の母親であり、自分の母親ではない女。

芽衣はため息をついて携帯を耳に押し当てる。

「……はい」

『あつ、芽衣さん！？あの、そこに卓真いませんか！？』

「は……？」

芽衣は思わぬ言葉に顔を顰めた。電話の向こうから聞こえてくる声は、今まで聞いたことの無いほど焦っている。芽衣は訝しげな表情で問いかける。

「遊びに行ったんじゃないの？」

『そ、それが……友達の家に電話したんだけど、どの家にも行っていないみたいで。お父さんや美穂ちゃん達が近所を探してるんですけど……』

焦って知り合いの家に片っ端から電話をかけている父や妹達の姿を想像して、芽衣はため息をついた。自分が夜中に帰っても心配しないくせに、どうして卓真だとそんなに大事になるのか。理由は分かっているが、それでも理解出来ない……したくない理由が、芽衣にはあった。

芽衣は電話の向こうに投げやりに言った。

「……分かった。私も近くを探してみるから」
『本当に？何か分かったらまた電話して下さい。それじゃ……』

電話が切れたのを確認して、芽衣はオレンジジュースに口をつけた。亜由美は気に入らないが、卓真は可愛い弟だ。三人いる姉の中でも何故か芽衣にばかり懐いている。芽衣自身も嫌な気持ちは微塵も持っていないかった。

芽衣は携帯をテーブルの上に置くと、大きく深呼吸をした。

（……生きてる人間相手は初めてなんだけど……ま、実験にはいいかな。たっくんならすぐ忘れてくれそうだし）

芽衣は視線を落とし、目を閉じた。壁際の席を選んで正解だったと思う。壁に向き合って座っているから、目を瞑ってじつとしても気付く人間は少ない。何より、この時間帯だと客も少ないし、やりやすい。

目を閉じると目の前が闇に変わる。そこから思考を一点に集中させた。弟の声や言葉を思い出せる限り頭の中にリピートさせ、やがて過去に交わした会話からつい最近の会話へと時間を戻していく。最後に交わした会話は、夜にケーキを食べたあの日。そこまで思い出せれば十分だ。

『たつくーん。行こうよー!』

芽衣の頭の中に最初に響いたのは、男の子の声だった。やっぱり誰か友達と遊んでいたんだと、芽衣は胸を撫で下ろす。

「ちょっと待つて。……あの女の子は友達？」

『え?……うん。名前知らないけど』

声が分かれた。一人はしっかりした大人の声、そしてもう一つは卓真の声だ。芽衣は頭に響く耳慣れない声に顔を顰めた。誰かが近くににいるのだろうか。

卓真よりずっと年上の、はっきりした声。聞き覚えはないが、その声は何か緊張感を持っているようだった。

「私ที่บ้านまで送ってあげるから、あの子についていっちゃ駄目。……分かる？」

『たつくーん。まだー?』

『でも……あの子、あさってまで遊んでくれればいいって……』

まるで録音された音声を再生するように、会話が進んでいく。状況はまるで理解出来ないが、卓真のいる場所はおそらくこの辺りではない。アンテナを伸ばすように、芽衣は更に二人の会話に集中していく。

「明後日になったらこっちに戻って来れなくなるかもしれない」

『で、でもお……』

(……明後日?)

芽衣は卓真の無事を確認しながらも、奇妙な感覚に陥っていた。話がよく掴めない。

（戻れなくなる、って……）

心の中でそう呟いた瞬間、芽衣の頭の中に全く別な『声』が割り込んできた。

『いやあああつー！』

（！？）

最初に聞こえたのは女の人の悲鳴だった。

『おかーさん？どうしたの、何が……』

『翼、こっちに来るな！早く、二階に……っ』

扉を乱暴に開けたり閉めたりする音、切り裂かれる音、何かが割れる音。叫び声が飛び交い、バタバタと水を散らしたような音が響く。ゴトツと何かが倒れ、それから脳裏に響く声は徐々に静かになっていった。

フローリングを靴で歩く音が聞こえる。靴裏で砂を擦る耳障りな響き。窓を開けるような音がして、人の気配が去っていく。

（う、やばっ……余計なのまで引き寄せちゃった！）

頭の中に叫び声や断末魔がリピートされていく。芽衣は咄嗟に頭を抑えた。強い感情は引き離すのに苦労する。下手をすると体調に異変が起こることもあるのだ。

頭の中に様々な声が響く。まるで人ごみの中に紛れ込むような感覚。そうやって徐々に徐々に対象から離れていく。雑音が耳に障る

が、さっきの会話を聞くよりはマシだ。

様々な人の声が響く中で、最後に一言だけ芽衣の脳裏に声が響いた。

『…………おかあさん…………。おとうさん？おにいちゃん…………？』

其の参・桜を求めて

『……あの、聖さん。前々から思っていたんですけど……』
「何ですか」

聖は『思念』の塊だというチハルの声に耳を傾けた。といっても声は自分のもので、喋っているのも全て自分なのだが。

『聖さんって、どうしてこんなことしてらっしゃるんですか？』
「暇だからです」

即答にチハルが苦笑する。そう答えるより他に理由がない聖としては、笑われるのはいささか氣にくわない。聖の感情に氣付いたのか、チハルはすみません、と笑いながら呟いた。誠意がないと聖は思う。

聖はチハルの言う桜の木を求めて、郊外の高級住宅地を歩いていった。普通の住宅地とは違って、この辺りは日本庭園があるような家や敷地内に家が2つ3つ建っているようなものもある。厳重な門にインターホン、時には庭にプールや池。錦鯉が泳ぐのを眺めていると、ベンツが聖の横を通り過ぎていった。

聖は眼鏡を押し上げ、錦鯉のいる池の前から歩き出した。桜の老木がある場所には大体目星がついている。目的地はここからそう遠くない。

『聖さんって優しいんですね』

ふとチハルがそう呟いた。聖はため息をつく。

「……別に、善意でやっているわけではありません」

聖は子供の頃から不思議なものを見たり聞いたりする方だった。幼い頃はそれが何なのか分からず、大きくなるにつれてそれを『幽霊』とかいうありきたりな言葉で表すのに疑問を感じるようになった。

もしかしたら自分は目の前に現れるチハルのような者たちに感心があるのかもしれない、と聖はそう思う。少なくとも彼らのことを調べるのは学校で学ぶことよりもずっと面白い。誰も足跡をつけない雪のうえに足跡をつけるような、そんな気分似ている。

『でも、こうやって助けていただいて、私はとても嬉しいですよ？』
「それは貴女に害がないからです。害があればそれなりの対処をしますよ」

聖は一件の家の前で足を止めた。大きな木の門に、似合わないインターホンが取り付けられている。門の上には楠木の枝がざわついていた。

表札には『三笠』と書かれている。かなり裕福な家なのだろう、他の家に比べて庭も広く、日本庭園のような庭は美しい。感動して声をあげるチハルに、どうせ業者を雇っているのだらうと聖が呟いた。しかしその顔もすぐ真顔に変わる。

（この家のはずなんですが……桜の木は見当たりませんね）

聖は門から見える範囲で桜の木を探す。しかし庭は広すぎて、全体を見渡すことは出来ない。

じっと中を覗いていると、庭から女の子が姿を現した。中学生くらいだろうか、制服を着たなかなかの美少女だ。少女は表情を曇ら

せながらこちらへと向かってくる。

『ひ、聖さんっ、家の方が出てきましたよっ』

「……静かにしててください。口が二人三脚をしていると怪しまれます」

門が開いて、小走りに中学生らしき少女が出てきた。勝気そうな顔をしているがまだ輪郭は幼い。身長はそう変わらないが、家の中を覗いていた聖に気付くと、目を吊り上げた。

「……誰？何か用？」

横柄な口を利く中学生だな、と聖は思う。しかしこうゆうとき、聖は決して熱くはならない。逆にいえば、こうゆう状況の時の聖はまるで詐欺師のように冷静だった。

「すみません、鈴木さんの家はこちらですか？」

聖はにっこりと笑って見せた。鈴木さんの家はこの家の一つ前、さつき錦鯉が泳いでいた家だ。

少女はむっとしたように口を開くが、聖はそれより先に用意していた台詞を口にした。

「私、高校で写真を撮っている者なんですけど、鈴木さんの家の錦鯉を撮らせてもらう約束だったんですが……ああ、こちらじゃないんですね」

「はあ？あんた、表札見てから中を覗きなさいよ。……それじゃあ、私急いでるから」

少女は何か苛立っているようだった。こちらに背を向けて歩き出

そうとする少女を見て、聖はその足元に視線を向ける。中学生の好むローファーと紺色のソックス。踏みつける地面はコンクリートだ。聖はそれを見つめながら、彼女がここで転んでくれたらいいと思った。

ここで彼女が何かに躓いて転ぶ、などということは普通ありえない。第一、彼女の足元には躓く要因となるようなものはなく、足取りもしっかりしている。

しかし。

「えっ、……きゃっ！」

目の前で少女は派手に転んだ。まるで何かに足を掴まれたような、そんな派手な転び方。聖はニヤリと口角を上げて、少女に手を貸す。少女の胸元には『□□中学二年三組 三笠美穂』というプラスチックの名札があつた。

「大丈夫ですか？」

聖は手を貸しながら、名札の名前と学年、組をしっかりと頭に入れた。そして口を開く。こうゆうときの聖は詐欺師のように厚かましい。

「ああ、□□中学の方だったんですか。私の妹もそうなんですよ。二年一組の佐藤って言うんですけど」

「……別に、他のクラスの奴まで知らないし」

「そうなんですか。あ、いえ、妹も写真が好きでして……たしか三組の友人の家に綺麗な桜の老木があるから、そこで写真を撮ってたこの間言っていたんですよ。随分古いソメイヨシノなんですけど」

聖は黒縁眼鏡の奥でニツコリと笑って見せた。聖は高校3年間帰

宅部で、写真の知識など殆ど無い。そのうえ一人っ子で、□□中学とはなんの関わりも無い。

チハルは黙ったまま、聖の頭の回転の速さに呆然としていた。

少女はため息をついて髪をかきあげると、苛立ちを隠さない表情で言った。

「ウチに桜の木なんてないし。別な奴でしょ。……私急いでるから。それじゃあね」

楠木が頭上で揺れている。聖は地面を踏みつけながら歩く少女を見送ると、チハルに向かって言った。

「……簡単だと言いましたが撤回しましょう。少し面倒なことになってきました」

サワサワと、葉擦れの音が響く。

其の四・遠くて近い運命の系

世の中には『プラス』の人間と『マイナス』の人間がいる。しかし『プラス』と呼ばれる者は殆ど存在しないと言ってもいい。人間の殆どは『マイナス』に属している。では、その違いは何なのか。それはまずチハルを例にとって説明しよう。

『そういえば……さつきどうしてあの女の子、何もないところで転んだんですかね?』

聖は先ほどの家から少し離れたファーストフードの店にいた。注文したセットのおまけの玩具を確認しながら、チハルが聖の口を借りて呟く。

『痛そうな転び方でしたよね……』

チハルは生前、『超プラス』の人間だった。

人間は喜び、悲しみ、怒り等、様々な感情を発する際に特殊なエネルギーを発する。そのエネルギーをここでは『思念の力』と呼ぶことにしよう。

『プラス』の人間はその『思念の力』を常に体の周りに纏っているが、思念は感情の起伏によって膨張する。普通プラスの人間は感情の起伏と共に多少思念の膨張が見られるが、超プラス人間になると膨れ上がった思念が身体から抜け出ることがある。しかもプラスに属する人間はそれをコントロールすることが出来ない。

この『肉体から離れた思念』はそのままでは害を成さないが、他の思念と接触することで時折具現化し、害を成すという現象が起こる。聖はそれこそが超常現象や怪談の類の正体ではないかと思っ

いる。

「……少々小細工をして転ばせました」

一方、聖はこれとは真逆の『超マイナス』の人間である。人間にはマイナスの力を持つ者がほとんどであるが、通常マイナスの人間はプラス人間や超プラス人間のように感情の起伏によって思念を膨張させることが全くない。しかしそれを超越した『超マイナス』の人間は少々勝手が違う。

『えっ、どうやったんですか？』

「……まあ、超能力みたいなものです」

藍原聖、西邑加南子、三笠芽衣は三人とも『超マイナス』人間に属している。彼女達は共に特殊な能力を持つが、それは超マイナスという性質ゆえのものだ。彼女達は通常のマイナスの人間には見えない『思念』を読み取ることが出来、また自分の『思念』をコントロールすることが出来る。

聖はフライドポテトをつまみながら言う。

「『思念』であの中学生の足を縛った……と言っても分からないでしょうね。つまりは片足だけ動かないようにしたので、自然とバランスを崩したんです」

『……なんだか凄いですね』

店の入り口近くで自問自答を続ける聖。彼女の力は『縛る力』。己の思念をコントロールして、形あるもののみならず、他の『思念』も縛り付けることが出来る。

聖は無表情に外の景色を見つめる。

「貴女と出会った時も、害のありそうなものならその場で縛り付けるつもりでしたよ」

『そ、そうなんですか……』

このとき、奇しくも聖のいる場所の反対側、店の奥の壁際の席にはげっそりした顔で新しく注文したコーヒーをすすめる芽衣の姿があった。口をつけたハンバーガーを投げ出し、真っ青な表情を浮かべている。まるで地獄を見たかのような顔だ。

芽衣はため息をついてコーヒーを飲み干した。

「サイアク……変なまで引き寄せた……」

芽衣の力は『思念を読み取り、送りつける力』。超能力に分類するのならサイコメトリーとテレパシーに近い。しかし一つだけ欠点を言うならば、芽衣の力は少々不安定で、受け取りたくない思念を呼び寄せてしまったりすることがよくあるのだ。

芽衣は呻くように呟く。

「……でも、たつくんが何か変なのに関わってるのは分かったし……探さない」と

大きく深呼吸をして、芽衣は立ち上がった。残したコーヒーとハンバーガーを片付けると、上着を手にとって店を出る。

丁度芽衣が店を出ようとしたその時、向こうから一人の人間が店に入ってきた。芽衣より少し身長が高く、スラッとした姿をしている。ジャケットにジーパンという服装がとてもよく似合う。男だろうと、芽衣の無意識がそう察知したがそうではない。

店に入ってきたのは加南子だ。

「……」

加南子は店の中を見回した。席は空いていて、どの席にも座れそうな感じがする。加南子はとりあえず店のカウンターでコーヒーを注文すると、一人用の席に腰を下ろした。店内の丁度中央だ。

「……明日、か……」

加南子はポケットから携帯を取り出すと、そこに刻まれた日付を見つめながら呟いた。

其の伍・失った記憶との再会

翌日の朝、加南子の姿はあの住宅地の空き家の前にあった。人通りは少なく、通勤のサラリーマンやOLが行き来するが、彼らは人に構っている余裕などない。加南子は人目を避けてこの空き家の前まで来た。

「……」

加南子は車庫側から庭へと足を踏み入れた。庭に入れば植木の囲いが邪魔をして、通りからこちらの姿は見えなくなる。加南子はゆっくりと入り口の前まで来ると、玄関の扉に手をかけた。まるで目玉のように覗き窓のガラスが反射している。

カチャリ、と扉が開いた。通常なら鍵が閉まっているはずだが、加南子は気にする様子もなく足を踏み入れる。呼ばれているのだと、加南子は思った。

「……ただいま」

ぼつりと、加南子はそう口にした。玄関を入ると右手に靴箱があり、その上には不恰好な粘土の置物が置かれている。ネズミの形を模しているのか、灰色の塊が加南子を無言で迎え入れる。

靴を脱いでフローリングに片足を置いた。すると何処からか子供の声が響いてくる。

『おかえり！』

ふと顔をあげると、いつのまにか玄関の前にある階段に5歳くら

いの男の子が立っていた。斜めに差し込む光が邪魔して、顔はよく見えない。

加南子は家にあがると、じっとその少年を見つめた。色白で、細い足首。水色のパジャマ。彼は言う。まるで上の階へと誘うように指を差しながら。

『こつちだよ、カナ。こつちで遊ぼうよ！』

「……」

加南子はじっと子供を見つめていた。表情が分からないのは陰のせいではない。自分の記憶が曖昧になりつつあるせいだ。

加南子は懐かしいものを見つめるような瞳で呟いた。

「そつちじゃないよ、兄さん。……『お兄ちゃん』」

ふと子供の表情が曇った。加南子にはそう思えた。

加南子はゆっくりと左側にある扉に手をかけた。途端に冷たい風が加南子の頬に触れる。窓が開いているのだと、加南子は思った。

「……お母さん」

目の前に広がったのは悪夢だった。倒された椅子とテーブル、落ちた花瓶、そして辺りに散らばった人間のものらしき赤い血液。キッチンの水がポチャンポチャンと音をたてて、流しに滴り落ちていた。

加南子はリビングのドアを開け、じっと部屋の中を見回した。あれから十数年が経ったはずなのに加南子の視線は3歳児のあの頃と変わりなくなっていた。

「お父さん、お兄ちゃん」

加南子はリビングに足を踏み入れた。父が好んで育てていたゼラニウムの花が倒れて、地面に土が転がっている。庭に続く窓は開け放されていて、カーテンが生き物のように蠢いていた。

加南子は、亡くした家族の姿を探していた。あの時は家族の誰かを探し出すまで全く状況が掴めなかった。けれど、今は分かる。

ふと辺りを見回していた加南子は、足元にあった何かに気付いて足を止めた。固くて白くて細い、棒のような何か。先っぽには5本の指がついていた。

『カナ』

階段にいたはずの子供の姿が、いつの間にか私の後ろで服を引っ張っていた。それでも加南子は振り返らない。

「……」

倒れたテーブルの影から、真っ赤な液体が広がっていた。絵の具でも表すことの出来ないほど生々しく、見ただけで息苦しくなるような深紅の血液。

生き物のように蠢くカーテンの隣の、倒れたゼラニウムの葉が金臭い香りを放つその下。

あの日の兄の姿は、そこにあった。

『カナ』

加南子はじつと後ろから呼ぶ声を聞いていた。まるで死んだ人間が喋っているような感覚。しかし、そうではない。

加南子は辺りを見回した。血を流し倒れている3つの死んだ人間の体。それはどれも、自分の愛した家族だった。

『カナ』

背後から聞こえる声に、やっと加南子は振り返った。いつの間にか子供のパジャマは左半分が赤く染まっている。それでもその笑顔は変わらず兄の顔をしていた。

霞んでいた表情がはつきりと見えてきた瞬間、加南子は兄の姿を抱きしめていた。

「お兄ちゃん……」

触れた感触はない。それでもそこに兄がいるという実感だけがあった。兄は自分よりもずっと年上の妹の姿を見つめながら、ニコニコと笑っている。

加南子は小さな兄を抱きしめたまま呟く。

「……今日で、あれからもう15年経ったんだよ、お兄ちゃん」

『……』

「そんな姿、いつまでしてる気……？」

『……』

笑顔のままの兄につられて、加南子は笑った。しかしその笑顔はやがて寂しい色へと変わっていく。

「お兄ちゃん、いくら寂しくても……遊び相手に誰かを連れてきちゃいけない。そうでしょう」

『……』

兄は笑顔のまま、空いている窓に視線を向ける。加南子もまた同じ方向に視線を向けた。

蠢くカーテンの向こう。窓際には桜の花びらが舞っていた。もちろんここに桜の木などない。風に弄ばれる薄桃色の花弁を見つめながら、加南子はふと思い出す。

「……さくら……」

ずっと遠い記憶の中。一家は毎年家族で桜を見るのが恒例だった。兄と加南子は丘の上に咲く一本の桜の老木を見るために、父や母を引っ張って丘へと歩く。

そしていつも兄は、帰り道に加南子に向かってこう言うのだ。

『カナ、次もまた見に行こう。約束だよ！』

ふと、加南子は後ろを振り向いた。兄は変わらず笑顔のまま、窓辺に舞う桜の花びらを見つめている。

思えばあれからずっと、春の季節は嫌いだった。桜を見ることさえ忘れて、いつの間にか自分だけ大人へと変わってしまった。

加南子は兄を見つめて、目尻を擦った。

「……お兄ちゃん」

加南子は兄の両肩を掴む。

「今年も、来年も、再来年も……桜の季節には絶対に見に行く」

兄の視線が加南子に向けられた。加南子は兄の肩を掴んだまま、ゆっくりと目を瞑る。太陽のような真っ白な光が辺りを包んだ。まるで春の陽のような、暖かな光。徐々に悪夢のようなあの日の光景が、光の中に溶け始めた。

これが加南子の力。具現化された思念『スピリット』を滅する、

3人の中で最も強い能力だ。

「だから、安心して……」

加南子と思う。あの日から体に備わってしまったこの『滅する力』は、全てあの悪夢のような日の憎しみの上にあるものだとはかり考えていた。しかしきつとそうではない。これは過去囚われた自分自身を救う力なのだ。

『カナ』

光の中に全てが溶け出すと、兄の声が遠ざかっていった。加南子
は思う。

（……分かったよ、お兄ちゃん。約束、だから……）

其の六・迷い子の少年

今日も高級住宅街を歩き回っていた聖は、ふと何処からか聞こえてきた子供の声に足を止めた。いや、気付いたのは聖よりもチハルの方が先だった。

『あれ、泣き声でしょうか……？』

何処からか子供の泣き声が響いてくる。三笠家の周りを歩き回っていた聖はチハルの呟きに顔を顰めた。彼女が余計なことに首を突っ込もうとしていたのが分かったからだ。しかし聖はすぐその異変に気付く。

「……なんだか響き方がおかしいですね。アツチに片足を突っ込んでいるような」

『あ、アツチ、ですか！？』

自分もアツチの人間と同じだということをすっかり忘れてチハルは驚く。聖はため息をついて、錦鯉のいる鈴木さんの家から離れた声のする方向へと足を向ける。

チハルは聖の瞳に映る風景を見つめながら、ふと奇妙なことに気付いた。これだけ大きな泣き声に、通りを行き交う人は誰も気付いていない。擦れ違う老人も、道端で世間話をする女性たちも。

そして奇妙なことはもう一つあった。声は、何処まで追いかけていても近づいてこないのだ。聖は住宅街を抜け、古い家の並ぶ道へと入る。しかし泣き声は何処まで行っても追いつかない。

「……丘、ですか」

ふと声を追って歩いていった聖が足を止めた。古い家が所狭しと建ち並ぶ小さな道の間。石で積まれた階段が丘の上へと続いている。神社の類ではなさそうだが、上は階段が急なせいで見ることが出来ない。

振り返ると、いつの間にか先ほどの高級住宅街が道の下の方に見えた。どうやら歩いてきた道が少しずつ傾斜しているらしい。そうするとここは丘ではなく山と言えるかもしれない。

上を見上げてチハルが呟く。

『片足がアチラ側にあるってことは、つまり生きている人間……ですよね？』

「そうなりますね」

『ど、どうでしょう』

焦る口調とは正反対に、聖は冷静だった。階段の目の前に立つと辺りに人気がないのを確認し、目を瞑り、右手を握り締める。まるで何か糸のようなものを掴むように。

そして次の瞬間、聖の右手が動くのと同時に、石段から人影が現れた。

『わっ、わっ、わあっ!?!?』

「叫ばないでください。二人三脚されると困ると言っただでしょう」

石段が波打つ。空間が弧を描くように歪み、次の瞬間、聖の上に小さな影が覆いかぶさってきた。聖は自分の身の安全を考えて避けようとしたが、その刹那チハルが聖の体を動かした。

『危ないっ!』

「あつ、お姉ちゃん！」

背後から声をかけられ、芽衣は足を止めた。振り返ると遠くから中学生の妹が走ってくる。今時の中学生らしくギリギリまでスクートをまくっているが、その格好で全力疾走は止めた方がいいと芽衣は思った。

芽衣は駆け寄ってきた妹に問いかける。

「美穂、たっくん見つかった？」

「うっん。どうしよう、お姉ちゃん、たっくん見つからなかったら！」

芽衣の妹・美穂は、泣きそうな表情で姉を見上げた。

卓真は昨日も帰ってこなかった。父も義母の亜由美も警察を呼んで、三笠家は大騒ぎになった。誘拐だなんだと父たちは騒いでいるけれど、そうではない。

「大丈夫。絶対に、帰ってくるから」

「ほんとう？」

妹の声にしっかりと頷くと、芽衣はふとその足に目を止めた。膝に絆創膏が張られている。なにをしたのかと聞くと、美穂は顔を顰めてみせた。

「……転んだ」

「転んだあ？何処で」

「……家の前」

何もない場所ですらして転ぶんだと芽衣は聞きたくなかったが、言わないことにした。きっと美穂も卓真がいなくなっただけで慌てたのだらう。

芽衣は美穂の走ってきた方向に視線を向け、そして自分の探していない方向を指差した。

「美穂はあつちを探して。私はこっちに行くから」
「うん、分かった」

妹が去っていくのを見送って、芽衣は路地を曲がった。人気がないのを確認して、ゆっくりと深呼吸をする。もう一度卓真の『思念』を辿ってみなくてはいけない。

芽衣は弟の無事を願いながら、思念を繋げた。

其の七・サクラサクラ

「……重いのでどいていただけますか」
「う……？」

階段から現れたのは5歳ほどの男の子だった。チハルに体を動かされた聖は、子供の下敷きになった格好でそう呟く。
子供は内気そうな印象の男の子だった。何が起こったのか状況がつかめないのか、しきりに辺りを見回している。

「だ、大丈夫だった？」

チハルが聖の口を借りてそう問いかける。子供は更に呆然とした顔で聖を見上げた。口が二人三脚していれば当然のことだ。
聖はため息をついてチハルに全てを任せることにする。

「？」

「痛いところとかない？大丈夫？」

少年は自分の体を見て頷いた。まだ混乱してはいるが、体調に異常はないらしい。チハルは少年に問いかける。

「どうしてあんなところにいたの？」
「えっと……ボール、おいかけて……おいかけて……」

何度もそう呟いて、少年は首を傾げた。聖はため息をつく。どうやらあちらにいた期間が長すぎて記憶が曖昧になっているらしい。首を右に左に傾けながら悩んでいるが、はつきりとした答えは返っ

てこない。

チハルは子供に問いかける。

『お家はどこ？……思い出せる？』

「うん……んー……」

少年は視線を泳がせながらそう言った。答えが『うん』なのか『うん』なのか、喋り方が不明瞭ではっきりしない。仕方の無いことだと分かっているが、聖は少し苛立ったように少年を見下ろす。

「どっちですか。はっきりしてください」

「えと、えとね………」

少年は何かを探すように視線を彷徨わせた。自分の記憶の中にある、家の周辺の景色を探しているのだろう。しかし此处には彼の知る景色は1つも見当たらず、少年は顔を歪めた。

『わっ、わわっ……だ、大丈夫だよ、お姉ちゃんがお家探してあげるから』

チハルがそう言って慰めようとしたその時。少年は弾かれたように顔を上げた。

「……おねえちゃん……めいちゃん……？」

そう呟くと、次第に泣きそうだった顔つきが元に戻ってくる。キヨキヨ口と視線を彷徨わせながら少年は何かを探している。チハルが首を傾げると、少年は言った。

「うん……うん。めいちゃん……きてくれる？」

「……………」

チハルは『めいちゃん』らしき人の姿を探して辺りを見回す。しかしそこに人影はない。ただ木々のざわめきが木霊しているだけだ。聖はため息をつく、辺りを見回す子供に視線を向ける。

「……………迎えはちゃんと来るんですね？」

「うん……………めいちゃんがね、むかえに来てくれるって」

少年は目尻の涙を擦って、聖に笑顔を見せた。聖はそれを確認して石段を上り始める。聖の行動に、チハルは慌てて少年を振り返った。

「だ、大丈夫でしょうか……………」

「大丈夫です。…………アチラの気配も消えつつありますし、おそらく迷い込むことも引つ張り込まれることもないでしょう」

聖は階段を一步一步歩きながら、前に視線を向ける。聖の体を借りている状態のチハルもまた、石段の先に目を向けた。

風が石段の両隣に並ぶ木々を揺らしている。少年は石段の下から聖の背中を見つめながら、ぽつりと一言呟いた。

「……………へんなお姉ちゃん」

あの桜の老木は、今もあの場所にあるのだろうか。加南子はそう思いながら、薄れた記憶を辿っていく。家族と共に歩いた思い出の

道も、長い年月の中で随分と変わり果ててしまった。

高級住宅地になったかつての道を歩きながら、加南子は路地を曲がった。道路の形だけが記憶を思い起こす鍵だ。

(……たしか、こっちに曲がって……)

迷いながら角を曲がろうとした加南子は、向こうから走って来た影に衝突した。

「っ！」

「きゃっ……！」

バランスを崩したのは加南子ではなく相手の方だった。前を見ずに走っていたのだらう。加南子は咄嗟に相手の腕を掴んだ。

何処かの中学校の制服を着ているところを見ると、どうやら相手は中学生だ。スカートをギリギリまで巻いている様子は今時と呼ぶに相応しい。胸元のネームプレートには『三笠美穂』と書かれている。

少女は苛立ったように加南子の手を振り払った。

「っ、あんた、どこ見て歩いて……！」

姉を真似て凄んだ美穂は加南子の顔を見た瞬間、声を失った。加南子は首を傾げる。しかし美穂はぽっとした状態で、二の句を繋げなくなっていた。

(お……お姉ちゃんの彼氏よりカッコイイ……)

ぼんやりと加南子を見つめる美穂。それもそのはず、今日の加南子の格好は上から下まで男と見紛うファッションなのだ。もともと

男に間違われやすい抽象的な顔つきの加南子ならなおさらである。
加南子は頬を赤く染めた美穂に首を傾げながら問いかける。

「……怪我は？」

「……えっ？あつ、大丈夫ですつ。すみません、ありがとござい
ましたっ」

言ってから美穂はしまった、と思った。怪我をしたと言えば、も
う少しこの格好良い男の人と話が出来たかもしれないのに、と。

（うー……お姉ちゃんに男の人の口説き方教えてもらっておけば良
かったあ……！）

「……まあ、こつちも悪かったし……」

加南子はそう言うってから、ふと相手に視線を向けた。制服から見
るに、この少女はおそらく住宅街に住んでいるのだらう。それなら
はこの辺りの地理にも詳しいはずだ。

「あ、聞きたいことがあるんだけど……この辺りに桜の木ってない
？丘の上にある老木なんだけど……」

「老木、ですか？……それなら……」

美穂はそう言うと、住宅街よりずっと奥を指差した。そちらに視
線を向けると、この道を少し行ったところに木々が生い茂った場所
がある。その風景を見た瞬間、加南子の脳裏に十数年前の記憶が蘇
った。

丘を指差す兄の姿、そしてそれを一緒にあって見上げる自分。

「あそこにある老木って、もともと私の家にあつた桜をあつちに移

動させたとかで……私が生まれるよりずっと前の話なんですけど」

私もよく行くんですっ、と美穂は言う。しかし加南子の瞳は丘の上に釘付けだった。薄紅色に染まる一本の桜が、風に揺れて見え隠れしている。

……まるで、自分を呼んでいるかのように。

其の八・償いと別れ

弟の思念を辿って来た芽衣は、路地の先に数日ぶりの弟の姿を見つけて叫んだ。

「たっくん！」

「……あつ、めいちゃん！！」

必死に駆けて来た芽衣とは対照的に、卓真の表情は笑顔だ。芽衣は胸を撫で下ろすが、姉としてほっとするだけではない。嬉しそうに抱きつこうとする弟の両肩を掴み、芽衣は腰を下ろして目線を同じ高さにした。

そして真剣な表情で言う。

「たっくん、知らない人にはついて行っちゃいけないってお母さんに言われたでしょう？」

「あ……う、うん……」

甘えるタイミングを失った弟は、悲しそうに瞳を伏せた。芽衣は静かに息を吐く。

「今回は仕方ないけど……今度は、知らない子についていく前に芽衣ちゃんにちゃんと行って？」

卓真がついていった相手はこの世の者ではない。それをこの歳の子供に理解させるのは難しく、芽衣の目に見えているものを信じさせるわけにもいかない。卓真はプラスの人間ではないから今回は偶然にあちら側にひっぱられただけなのだろう。

(……偶然、か)

思念は似たような思念に引き寄せられる。負の感情は負の思念を呼ぶから、不幸は立て続けに起きるのだ。偶然と心の中で呟きながらも、芽衣には心当たりがあつた。

「……でも……」

ふと、弟の手が自分の手に触れる。我に返つた芽衣の目に、弟の無垢な瞳が映つた。

「……めいちゃん、帰ってくるの遅いから……。お母さんといつしよに待つてるのに、めいちゃん帰ってくる前に眠くなっちゃうから

……」

「……たつくん……」

「お母さんはね、めいちゃんのためにご飯も用意して待つてるんだよ。……待つてるうちにお腹すいちゃってね、いつつもつまみ食いしようとするんだけど、お母さんすごく怒るの。めいちゃんのなんだから、って……」

「……」

芽衣は瞳を逸らした。脳裏に夜中まで自分を待つ亜由美の姿が浮かんでくる。じつとこちらを見つめる卓真の顔に亜由美の表情が重なって、芽衣は心苦しくなった。

芽衣は卓真を階段に座らせ、自分も石段に腰掛ける。上を見上げると、もう空は茜色に染まり始めていた。芽衣は夕日を見つめながら言う。

「……めいちゃんはね、たつくんのお母さんが嫌いなわけじゃない

んだよ」

「そうなの？」

うん、と芽衣は卓真に頷いてみせる。嬉しそうな表情を見せる弟に苦笑しながら、芽衣は足下に視線を向けた。

「……ただ、ね……。たつくんのお母さんを見ると、めいちゃんのお母さんが可哀想になってくるの」

石段の隙間から生えた雑草が、夕日を浴びながら揺れている。サワサワと響く風の音が物悲しく聞こえて来た。

卓真の視線を感じながら、芽衣はぼつりぼつりと話し始める。

「……めいちゃんのお母さんはね、お父さんとお婆ちゃんと仲良くなかったの。だから、ずっと前に……死んじゃった」

本当のことを言つて卓真が理解出来るかは分からない。昔から続く古い家柄を守るため、三笠家には男の子が必要だった。しかし芽衣の母には子供が出来ず、やっと生まれた子供達は女の子だった。

歳をとればとるほどに、母は追い込まれていった。軽い鬱状態からノイローゼに変わっていく様子を、芽衣ははつきりと覚えている。それでも母は芽衣や美穂の前で愚痴は一言も漏らさなかった。いつも不甲斐ない自分を責めていた。

「……お母さんの苦しみを……私は分かってあげたかった。もし聞けるのなら……全部聞いて楽にしてあげたかったのに……」

「めいちゃん……泣かないで、めいちゃん……」

膝を抱えて肩を震わせる姉に、卓真はそう呟く。そして震える背中に手を伸ばすと、ゆっくりとさすりはじめた。おそらく亜由美に

そうやって宥められているのを思い出したのだろう。芽衣は卓真の手を通して、亜由美の優しさを感じたような気がした。

石段はずっと先まで続いている。そんなに登っていないはずなのに、チハルには長い間この階段を上っているような気がしていた。それは数分ではない。何十年も、何百年も……そう、あの桜と別れたあの日に遡るかのように。

聖の体は、いつの間にかチハルの体が変わってしまったかのようにだった。どこからか下駄の音が響いてくる。カラン、コロン、カラン、コロンと。なんて涼やかで気持ちのよい音なのだろう。

『おはようございます。今日もお綺麗ですねっ』

あの老木を見上げて、チハルはいつもそうやって挨拶をしていた。するといつも桜の枝が揺れるのだ。風のせいだと皆言うけれど、自分分は違うと思う。

『おはようございます。今日もお元気ですかっ』

風が頬を撫でる。木々のざわめきが聞こえる。みんなが喋っている。みんなが話しかけてくれる。全ての生きとし生けるものは、きっとそうやって人に話しかけている。

けれど誰もそれに気付かない。

『おはようございます。今日は……』

寝込んだ時、窓から見える景色だけが私の世界だった。硝子に阻まれて何も語ってはくれない、まるでお葬式の写真のような世界。

『今日は……』

ふと足下を見ると、聖のスニーカーが目に入った。石段の上に両足を揃えている。どうやら、ここで石段は終わっているようだった。スニーカーの横を、一枚の桃色の花びらが通り抜けていく。風の音に誘われるように、チハルはふと顔をあげた。

『……あ……』

桜の花びらが、まるで吹雪のように視界を覆う。一步、また一步とチハルは丘の頂上に植えられた桜へと歩み寄っていった。

そこには、かなり古い桜の老木と、真新しい桜が並んでいた。2本は同じ注連縄がかけられていて、周りには囲いが作られている。聖は古い桜を見つめながら呟いた。

「あなたが探していたのは……おそらくこちらですね」

満開に咲き誇る桜の隣で、老木は枝の先に一つ、二つと弱々しい小さな花を咲かせているだけだった。葉も少なく、寿命が近いことは聖の目にも明らかだ。

チハルは桜の囲いの前まで来ると、じつと枝の先を見つめた。薄桃色の花びらは今にも散ってしまいそうに揺れている。

『……待っていて、くれたんですか……？』

チハルはそう呟くと、涙を堪えるように空を見上げた。夕焼けが雲を橙色に染めている。あの頃と同じ、変わらない空の色。そして、

年老いてしまっても自分を待ち続けてくれた、この桜の老木。

チハルは視線を桜の木に戻すと、その枝先に付いた小さな花に語りかけた。

『今日は……お別れを言いに来ました』

きっとこの老木は、チハルが亡くなってからも幾つもの春をこうして咲き続けてきたのだろう。花が少なくなても、葉がつかなくなっても。

桜色の花びらが揺れる。

『あなたも……お別れなんですネ』

ふっと、体が軽くなった気がした。咄嗟に振り返ると、こちらを見つめる聖の瞳が見える。チハルは桜の木に視線を向け、そして今度は聖に笑いかけた。

『……聖さん。ありがとうございました』

「……見つかって良かったです。このままずっと取り憑かれたらどうしようかと思いました」

『あはは、またまた……』

聖は老木とチハルの姿を見つめる。こうしてチハルの顔を見たのは初めてだった。どこにでもいそうな、平凡な少女の顔。ただ、その表情は視線を引きつける特別な笑顔を持っている。それはまるで春の暖かさのような……。

木々がざわめき、強い風が吹く。春一番の強風は桜の花びらを舞いあげて、辺りは一面の桜吹雪となった。

『聖さん。……本当にありがとうございました……』

視界を覆う桜の中で、聖はたしかにそんな声を聞いた。

其の九・輪廻を巡り

加南子が丘の上に付いた時、そこには誰もいなかった。ただ桜の木が風を受けてくすぐったそうに揺れている。夕日はビルの中に隠れ、丘は薄暗くなっている。しかし桜だけは闇の中でぼんやりと浮かび上がって見えた。

加南子はゆっくりと桜に歩み寄る。2つ並んだ老木と、新しい桜。記憶の中の兄の声が言う。

『あの縄はね、この木がシンセイなものだからなんだよ』

得意げに語る兄。おそらく父か母から教わったのだろう。しかし幼い頃の加南子は鋭い質問を浴びせる。

『シンセイってなあに?』

『えっ?……ええと、それは……』

加南子はクス、と笑った。兄はきつと困った表情でオロオロしていたのだろう。それ以上のことは覚えていないが、慌てた表情の兄が思い浮かぶ。

ふと桜の前の柵に歩み寄ると、奥に看板が立てられていた。加南子は携帯を取り出すと、ディスプレイの光を明かり代わりにして看板の文字を見つめる。

そこには達筆でこう書かれていた。

『輪廻桜』、と。

「輪廻、か……」

加南子は看板を見つめながら呟く。この名前からすると、この新しい桜は古い桜から株分けされたものののだろうか。

加南子はじつと満開の桜を見上げる。風が吹くたびに花を散らす儂い姿はいくら見ても飽きない。できるのならば、このままずっとここにいたいくらいだ。

しかし、そうすると祖母や祖父が心配する。今日は、家族と生き別れたあの日だから。

「……そろそろ、帰ろうかな」

加南子はそう言つて、携帯をポケットに押し込んだ。そして最後にもう一度、桜の木を見上げた。
その時。

「こんばんは！また来たよ！」

ふと石段の方向からそんな声が聞こえた。加南子が振り返ると石段の前に人影がある。人影は加南子の姿に気付くと、慌てた様子で口を塞いだ。

「わ、わわわっ……ひ、人がいた……」

声は女の子の声だった。おそらく桜の木に話しかけていたのだろう。加南子は聞かなかったフリをして、少女の隣を擦れ違った。幸いなことに、暗くなってきたおかげでお互いに顔は見えない。

石段を下りる加南子の背後で、呟くように

「……聞こえなかったのかな？」

という声が聞こえてきた。加南子はクス、と笑って階段を下りる。丘から見下ろす街の風景は、空に輝く星のように輝いているように見えた。

其の十・再び出会うその時に

四月は柔らかい春の日差しと共にやってくる。暖かな光を一心に受けて輝く桜の葉は、丘の上で今日も揺れている。隣で永遠の眠りについた老木は緑の葉すらつけていないが、その命を受け継いで新しい桜は次の春を舞っている。

そして、そこから遠く離れた街では、新しい生活を始める3人の姿があった。

「……だあかあ、大丈夫だから！アタシが苛められるような人間に見える？見えないでしょ？」

「そ、そうなんだけど……。ほら、先輩とか……」

「大丈夫だってば！亜由美さんは心配しすぎ」

『タイプ鼎和学院寮D棟』と表示された建物の前で、芽衣はスポーツバッグを肩に下げて亜由美の説得を繰り返していた。家を出る前から何かと不安を口にしていたが、大学の学生寮を目の前にして足止めをくらうはめになるとは思っていなかった。

亜由美は卓真そっくりのたれ目で寮の建物を見上げる。

「でも……芽衣ちゃん、ゴールデンウィークには帰ってくる？」

「帰って来ます。……ちゃんと、ね」

じゃないと、たつくん泣いちゃうから、と芽衣は微笑んでみせた。その表情に亜由美はほっとした表情を見せる。亜由美は持っていた荷物を芽衣に渡し、そして芽衣に聞こえるか聞こえないかの小さな声で囁いた。

「……芽衣ちゃん、ありがとう」
「……なにか言った？」

芽衣は聞こえないふりをして、荷物を抱え直す。なんでもないと亜由美は首を横に振って、そして笑った。

鼎和学院寮の前には、芽衣たちのように父母と別れて寮に入っていく新一年生の姿があちこちにあった。殆どが家族連れで来ているが、中には1人でここまで来た一年生もいる。

「……重い……」

加南子はそう言っただけ荷物を一度地面に下ろした。祖父母には家で別れを告げ、1人でここまで来た。祖父は車を持っていないし、重い荷物を祖母に持たせるのも悪い気がしたからだ。

「はい、一年生はこっちで部屋を確認してください。先輩がお部屋まで案内します」

加南子は入り口に視線を向ける。先輩らしき人々が入り口で部屋番号を教えていた。どれもまだ高校生気分の抜けない顔だが、中には中学生並に身長の小さな者もいる。

「お名前は？」

「……藍原、聖です」

（……悪趣味なバッグ……）

先輩に部屋番号を確認する小さな一年生。しかしその肩に下げられたバッグは原色で染められたスポーツバッグだ。黒ぶちの眼鏡をかけて地味そうな外見をしているが、中身はそうとう派手好きらしい。

自分も部屋を確認しにいかうと荷物を抱え直した時、門の外から誰かが駆け込んで来た。もう集合時間は過ぎている。おそらく遅刻したと思うたのだろう。

「ち、遅刻……っわあっ!？」

重い荷物を持っていたせいか、それとも走ってきたせいか。門を過ぎたところでその少女は花壇に足を引っかけて派手に転んだ。あまりの転びように、集まっていた一年生も先輩も彼女に視線を向ける。

咄嗟に機転の利いた先輩が、彼女に駆寄った。

「あ、あなた大丈夫？」

「あ……はい、なんとか……」

顔をあげた少女は、恥ずかしそうに笑って見せる。平凡な顔で、これといって目立つところのない、何処にでもいそうな少女だった。先輩の手を借りて立ち上がった彼女は、周りの視線に恥ずかしそうに肩を竦めた。先輩は怪我がないのを確かめて、少女の顔を覗き込む。ポケットから一年生の名簿を取り出すと、少女に問いかけた。

「あなた、名前は？」

「あっ、はい」

少女は先輩の顔を見上げて、まるで暖かな春のような笑顔を浮かべる。

「霞取、千春といいますっ!」

春は、出会いの季節だ。

FIN
・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0072q/>

玉響 - Crossed road in spring day

2011年1月11日20時40分発行